
ラブカクテルス その86

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その86

【Nコード】

N3507F

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は飲んだことのない未知のカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は流星でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私はレストランを営んでいる。

小さいながらも魚介類をメインとしたシーフードレストランだ。

大学を卒業してからしばらく一人旅をして周り、その途中で立ち寄ったこの海岸が好きになって、いつしかここでレストランを開くのが夢となった。

そして、そんな想いを機に、私は真面目に働くようになり、コツコツと貯金をして、やっとの事でこのレストランを始める事が出来たのだった。

店に出す料理も、あちこち旅した時の、その場その土地で印象に残っていた物を色々思い出し、食材と調味料を調達しては試作を重ねて、レシピを増やした。

そしてそれはだんだんと趣味のようになり、たまに開いた試食会ではかなりの評判で、このレストランを楽しみにしてってくれる人も

多くなった。

そしてそれらは地中海風のものからエキゾチックなものまで幅広い種類をもを再現してみたり、合わせて創作料理にしてみたりと、珍しいものが次々と揃い、そしてそのメニューは開店前から噂が噂を呼んだせいで、いよいよ店の初日という時には、行列もできる程の繁盛振りで、私自身も驚き喜んだのは記憶に新しい。

一時は予約も三ヶ月待ちや半年待ちにまでなつて、それはそれは忙しい毎日だった。

そしてこのレストランの看板料理は、私も自信を持ってオススメできるクラゲとキノコの海鮮パスタだった。

これはある南の島に行った時に仲良くなつた漁師さんから頂いたその島の常食、つまりはクラゲ。

これが、何とも言えない食感と、ツルツとした舌触りが最高で、いや、最高を通り越して、奇跡に近いそのあまりの衝撃を受けた食材だったために、それを使った料理を模索した結果、食べやすい大きさの、かわいいハートの形に形抜きしたパスタとしての使い道を思いつき、しかもあまり知られていない高級食材、高山地帯のある村で、これまた仲良くなつた村長さんからご馳走に与かった、特別珍しいお祝いの時にしか食べないという貴重なキノコを合わせて、絶妙なスパイスのハーモニーで仕上げた、まさに絶品パスタだと自負したもののだった。

私は色々な場所のできた友人達と、マメに連絡をとりながら友好関係を繋ぎ、深めていたせいで、今ではそのネットワークが仕入れに役立ち、最高のパートナーとして付き合いを続けている。

しかし調達に手が係る物はやはり限定された数しか入ってこないため、いつでも同じ食材で作るレギュラーメニューは少なく、シエフのお任せ物が多いのが自分的には悩みの種だった。

それを食べたくてやって来たお客に残念な想いをさせる事が度々あったことがそのきっかけで、私は少し、このレストランらしいレギュラーメニューになるものを考え始めて、試作を幾つか作つたとこ

るだった。

そしていよいよ、常連を迎えての試食会が今夜行われる。選定した食材は、やはりクラゲだった。

南の島の友人と相談したところ、あの絶品クラゲはかなり安定した収穫量を期待でき、価格も無理がない額でいいと言ってくれた。

私はそれをベースに、クラゲを皮に使った餃子やシウマイ、クラゲの千切りを素麵に見立てた流しクラゲ素麵、クラゲの頭まるごと使った唐揚げ、海老や野菜と混ぜて作ったクラゲのかき揚げ、シンプルなクラゲの塩焼きと、最後にクラゲのゼリー。

私はわざと全ての食材にクラゲが使われているとは話さず、招いた常連にクラゲ三昧を味あわせた。

それぞれの評価は甲乙付けるのが難しいと言っくらしいの出来らしく、かなり味にうるさい食通の常連も、唸りながら食したかと思うと、満面の笑みで頷いたほどだった。

私は胸を撫で下ろし、ようやく決め手となるレギュラーメニューの出来上がりにホツとし、改めて何か自信のようなものを確立した気がしたのだった。

それからレストランはそれまで以上の売り上げを見せ、大反響の中でテレビや雑誌にまでも取り上げられ、テナヤワンヤになった。

そして増えるお客の対応に仕方なく、支店を出してレストランを拡大させる話になり、待っていてくれているお客のためならと、しぶしぶそうすることになってしまった。

私は世界各地の気に入ったロケーションの地と、本店近くに十店舗、新たにレストランを展開し、それぞれの店で働くことになる店長達も料理指導は元より、マナーや経営方針までを自ら教え、いよいよそれぞれの開店を迎えることとなったが、ある問題が発生した。

それはかなり深刻で、例のクラゲの入手が間に合わないというトラブルだった。

さすがにいきなり増やした店舗全店でクラゲのレギュラーメニューを出すとなると、単純に考えても今までの十倍の数量が必要になり、それは南の島の友人には予想外な話で、それほどの大量の収穫を安定した供給で続けるには無理があると言ってきたのだった。

クラゲは南の島では確かに常食ではあり、当たり前前に取れる食材だが、こちらの要望通りに捕っていたら、近いうちにクラゲはいなくなってしまう。

私はその話がわからない訳ではなかったが、もう店舗を出すことを止めるには難しいところまでできていることを必死に告げ、そこを何とか出来ないかと泣き付いた。

南の島の友人は、少し時間が欲しいと言い、島の神様に聞いてみると言って、電話を切った。

神様？

こんな状況で、なんで迷信なんかに伺いを立てるなんて言えるのか？ひどく呑気だと、私は少し腹を立てた。

しかしそんな南の島の友人から、明るる日の昼前に連絡があった。

私はあまり期待をしないでその電話に出たが、南の島の友人からの回答は、神様のおかげで何とか出来そうだという事だった。

私は喜び、南の島の友人に半泣きで礼を言った。

しかしそんな南の島の友人は一つだけ条件として、クラゲの食材の加工までを島でして出荷させて欲しいと言った。

私は今までのように、発泡スチロールの箱に生のままで梱包するのがなぜダメなのか首をヒネったが、別に問題もないだろうと、軽くそれに了承の返事をしたのだった。

そして、南の島の友人の言った通り、クラゲはその後安定した出荷を続け、店の拡大の成功に繋がることとなったが、確かに味は相変わらず申し分なく、品に問題はない。いや、以前よりも歯ごたえなどは良く感じる気がするくらいだと思っただが、だが、何だか色と大きさが若干変わった気がしないでもない。

いや、気のせいだろうか？

料理として出したとしても、お客からは喜びの声が絶えないのは事実だし、評判は前と変わらず良い評価をいただいている。

私はなるべく詮索をしないようにと、その事を気にしないように努めたが、やはり、

私はある程度落ち着いてきた頃を見計らって、今回の協力に対する感謝の気持ちを伝える事を口実に、南の島の友人を訪ねる事にしたのだった。

俺は今夜も、遠い国の友人にクラゲを送るため、島の神様から頂いた船に乗り込んだ。

運転席に座り、クラゲの沢山いるところを思い浮かべると、その船は勝手に動き出す。

真っ暗い中を船はぐんぐんと進み、やがて周りは星達に包まれた幻想的な世界へと変わる。

俺はその美しい星の輝きに酔い知れながら、この船の素晴らしさに改めて感激し、そして感謝した。

そして、そうしている間に船はやがて、ポイントに着いた。

俺は網を仕掛ける支度にかかると、いつものようにきれいな透き通っている水面にそれを投げ入れ、しばらくその網が水面と解け合っているような所をぼーっと見つめて、この船との出会いを思い出した。

遠い国の友人の困り果てた話を聞いて、俺は仕方なく昔から村の神殿、神と会話ができるという山の頂上にある石で出来た社を目指した。

そしてそこで薪を積み上げ、聖なる炎を立ち上らせ、その周りをイニシエの舞で踊りながら神の降臨を待った。

二時間くらい舞続けた頃だろうか。

俺はトランス状態だったのでよくは憶えてないのだが、凄いい音ともにもそれは突然現れたのだった。

俺は舞を止めて音がした土煙り立ち込めるその場所へ近づいてみると、そこには銀色に光るこの船があったのだった。

その下の方に開かれた扉を俺は慎重に入っていくと、そこには何とクラゲが数匹横たわっていた。

どうやら死んでしまっているようだ。

俺はどこかに誰かいないかを探してみたが人影は見えない。

これはいったい？

俺は思った。これはきつと神様からの贈り物に違いない。

クラゲは俺の村で捕れるものとは違う種類らしく、何だか頭の上の方に目に似た突起が気味悪く付いてはいたが、少し切つて恐る恐る食べてみるとなかなかイケる事がわかった。

見た目の悪さもきつと、それを加工することでどうにかなりそうだ。そんな事を確かめながら、その船の運転席らしい座り心地が悪い椅子に腰掛け、こんなクラゲがいっぱい捕れるところに行つても行けると遠い国の友人の頼みも聞いてあげられるのにと、そんな事を思つてみると、その船は突然動き出た。

そしてこの赤く光る不思議な漁場に連れて来てくれ、そして今日も俺の張つた網にはクラゲ達がいい調子でかかつてきていた。

私がこの島に久しぶりに着いたのは飛行機の時間帯の都合で夜中となった。

ホテルに向かうタクシーの中で見上げた島の夜空は、都会では見られなくなった星空を、まるでプラネタリウムのようにはつきりと輝かせ、その中でも赤く光る火星は、あたかも自慢するかのように見事に光を放っている。

私はその満天の夜空のに浮かぶそんな火星にしばし魅とれていると、一筋の光がそれを横切るように走った。

流れ星？

俺は反射的に祈った。

商売がうまく行きますように。

そしてそんな私は疲れているようで、そのうちなんだかタクシーの中でうとうとし始め、ホテルに着くまでの間、コクリコクリと眠ってしまったのだった。

そして夢に出てきたのはクラゲに似た銀色のUFOで、中からはこれまたクラゲに似た生物が火星人と語り、仲間の復讐だと、拳銃の様なもので不思議に光る光線をこちらに放ってる、リアルな…

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3507f/>

ラブカクテルス その86

2011年2月16日19時33分発行